

曲り角

昭和47年4月第1号

<研究報告>

運動の感覚を育てる幼児の体育指導

徳島大学 岡本卓夫

「運動の感覚を育てる」ということの意味を、生理心理の立場から視覚、聴覚、皮膚感覚、深部感覚、平衡感覚、有機感覚等による知覚のイン・プットのメカニズムの開発、それをもとにした連合野のメカニズムの開発、さらにそれらをもととしたアウト・プットのメカニズムの開発、そして意欲のメカニズムの開発の四つの立場から考え、また、体育の立場からは、身体運動の場で必要なからだの働きのうち、特に、マックロイのあげているものを参考にして、物や人と自分の距離を判断する能力、身体や身体各部の位置や動きを正確に知覚する能力、身体のバランスを知覚する能力、物や人を含めた場を知覚する能力、空間関係を視覚化する能力、感覚-運動を協応さす能力、複雑な運動を統一協応さす能力、運動を時間的に統合し協応さす能力の8つを考え、これら8つの諸能力が身につくよう、これらに関する要因を含んだいろいろの運動遊びを幼児に与えることによって、その子どもが、生理心理の立場で示した4つのメカニズムができるだけ多く開発され、いつでも、どこでも、どのような運動刺激に対してでも、すばやく、正確に適応していけるようなからだの働きになるとき、「運動の感覚が育った」と考えた。

そして「運動の感覚を育てる」ための指導

の基本原則としては、「幼児が夢中になってとり組むような運動遊びの指導をする」ということにその主眼点をおいた。

また、指導の結果、「運動の感覚がどれだけ育ったか」すなわち、前述した4つのメカニズムがどれだけ結合されたかということについては、直接評価できないので、そのような結合のあらわれとしての運動のパフォーマンスを測定することによって、間接的に推察することにし、体育の立場から、測定項目として(1)ボールの投げ入れ、(2)立巾とび、(3)棒上片足立ち、(4)両足連続とび越し、(5)くぐりぬけ、(6)円筒ボール受け、(7)平均台後下りの7項目とりあげた。以上のような論拠に立って、実験的に研究に取り込んだ。

研究の基本的態度としては、現場の毎日の保育計画をくずさないようにすることを原則とし、5才児の男女30名づつを同質の統制群と実験群に配し、昭和46年6月16日～7月12日までの約1ヶ月間のうち15日間、1日約40分間の指導を、体育の立場でのべた8つの能力が育つと思われる18種類の運動遊び(園の実態とも併せて)を中心とした特別のプログラムを組み、前述の指導原則に立って、諸種の指導形式、指導助言や示範などを適用し、幼稚園の専任教諭によつて指導が進められた。毎指導の評価を、観察によ

夢中度(夢中5、かなり夢中、普通3、あまり反応なし2、全くなし1)であらわしていたが、その平均度合は4.1であった。

このような指導の結果、先にのべた7種の測定項目においてそのパフォーマンスを測定した。その結果は、表に示す通りである。

このようなことから、幼児には、運動に係る諸感覚を刺激するような運動遊びを、しかも彼らが夢中になってそれにとり組むよう指導してやることによって、彼らの運動の感覚を育て、伸ばしてやることのできるのではないかと思われる。

指導後における両群の平均の差

項 目	統 制 群			実 験 群			平均の差	t	有意差
	N	\bar{X}	S	N	\bar{X}	S			
ボールの投げ入れ(回)	29	3.0	1.93	29	4.6	1.51	1.6	3.478	※※
立 巾 と び (cm)	29	128	13.76	30	13.6	12.26	8	2.339	※
棒上片足立ち(秒)	25	19.2	10.52	25	29.4	21.11	10.2	2.127	※
両足連続とび越し(秒)	29	4.7	0.69	28	4.0	0.44	0.7	4.487	※※
くぐりぬけ(秒)	29	4.4	0.52	29	4.0	0.55	0.4	2.777	※※
円筒ボール受け(回)	29	5.6	1.52	28	6.4	1.15	0.8	2.197	※
平均台後下がり(秒)	29	33.7	13.96	28	25.4	10.00	8.3	2.703	※

註 ※※……1%、 ※……5%

<随 想>

雑 感

鳥取大学 山根成之

体力づくりが叫ばれだして久くなる。よく研究会などに体力づくりがテーマになり、我が校は努力の結果、全国平均に比べどうであるとか、県はこうであるといったことを耳にする。

反面体力づくりに対する反対の意見も多く反対でなくても手段、その他の面に対しての批判の声も大きい。

反対理由はさまざまであるが、中でも人間を忘れたところの体力づくり、つまり馬車馬にでも鞭をあて、機械的に行動(運動)をさせる如く行う体力づくりに対するものである。

なる程、この様な場面を見たことがある。或る学校の体育の授業で、教師がピッ、ピッと笛を鳴す。その笛を合図に生徒は、腕立、背筋の運動、腹筋の運動…等の運動を次から次へと体力づくり目指して黙々と行っているのである。

これを見て、戦中、教官の号令のもとに、エイ、ヤッ、と行っていた銃剣術を思い出した。このように子供を無視した体育が行われている以上、後に苦痛ばかりが残る子供が好むべき体育が嫌になり、何のための体力づくりかと批判的になるのも当然と思われる。

さて、先程人間を忘れた体育といったが、人間を忘れない体育、或いは人間味のある体育とは一体どのようなものであろうか。

普段人間的といった言葉を漠然と使っているが、いざ「人間的とは」と自問してみるとなかなか解答出来ない。

最近、名古屋大学の小林氏は「態度測定による体育の授業診断」という発表の中で「体育する喜び」があってはじめて「授業内容に対する評価」が生じ、次いで「体育に対する価値観」へと発展してゆくとして、この3次元に成功することが良い体育の授業であると

している。つまり「飲む」のないところに体育は存在しないというのである。

この発表を聞いて漠然としていた「人間的」という言葉がいくらか具体的に解せられるようになった。

体育を成立させるには「飲む」は必要条件ではあるが十分条件ではない。「評価」とか「価値感」へ高めてゆくためには「飲む」は必須の条件であるというのである。

私の速断かも知れないが「人間的」＝「飲む」として考えても良いのではなからうか。

運動は呼吸、循環機能を促進させ、多かれ少なかれ苦痛を伴うものである。この苦痛を克服し「飲む」を感じずとはどういう心的機能が働くのか。

< 話 題 >

転 移 と 課 題 の 困 難 性

東京教育大学大学院 金 本 益 男

転移とは“学習されるべきある課題に対して、すでに学習した課題が影響を及ぼすこと、あるいは、すでに学習された課題と関係のある新しい場面において、すでに形成された反応を使用することを含んでいる。”とシンガーは述べている。今日の多くの研究の主題は転移がいかに起こり、又どの程度転移されるかということであり、課題の困難性に関する過去の研究をみると様々な結果が出されている。たとえば、パーリッヒ、レビス(1954年)は、アイオワ追跡動作検査器で、簡単な課題から困難な課題へとトレーニングを進めた場合、大きな転移を見出し、同様な結果がロールダール、アーチャー(1958年)によって回転板追跡の実験でもされている。一方、ベーカー、ウィリー、ガニエ(1950年)は、クランク・ハンドル回しで、困難な課題から簡単な課題へとトレーニングした場合、大きな転移があると述べている。ギブス(1951年)は、ハンドル回し作業とかじ取り作業を用いた研究で、困難な課題から簡

これについては欲求と苦痛の強さの問題であるとか、あるいは自己実現の要求、目標達成動機等々云われてはいるが飲む=f(個人・物理的条件・指導)という具合に考えられるであろう。

料理の味つけて塩とか砂糖、胡しょう、しょう油...等の総合されたもののおいしい味を出すのであり、これらの一つ一つを抽出したところでおいしい味を経験することは不可能である。と同じように飲むもさまざまな要因の総合されたものから生ずると思われる。この飲むに立脚した体育を追求し発展させてゆくのは体育心理に課せられた重大な任務ではなからうか。

単な課題で大きな転移が生ずるとしているが、これは、両方の課題において、同じような種類の能力が要求された場合であることを明らかにし、彼は課題の困難性が増すことは、学習の能率を最も早く上げるのに必要な原因にはならないであろうと忠告している。即ち、課題の困難性には最適な範囲(Optimum Zone)があるためであるとしている。又、デイ(1956年)は、反応の場合に関しては、むずかしいものからやさしいものほうへの場合、その逆の場合よりも、より多くの転移をすると結論している。一方、ホールディングは、これに関する研究で“もし、トレーニング課題が、その後続く転移課題に必要な全て、もしくは、その多くを含んでいると転移は大きく、もし、含んでいないか、少ないと転移は低いであろう。”という「包含の法則」(The Principle of Inclusion)を打ち出した。このように、もし、“包含の法則”が成り立つとすれば、困難な作業は、やさしい作業において必要とされるスキル要

要を通常含むので、困難な課題から簡単な課題の場合に大きな転移が生ずるであろう。しかし、シンガー(1966年)は体育の活動(洋弓)を用いた研究において、有意な差は見出ししていない。

一般に技術を教える場合に、むずかしいものからやさしいものへと教えることの理論的な支持が集中している。しかし、転移と課題の困難性の問題に関連した現在の研究の中からは矛盾した結果が得られている。

ピロドーは、このような矛盾した研究結果を検討して、次のようなことを示唆している。即ち、“人間の遂行行動は単一的なものではなく、そこには様々な要素が関係しているものであり、遂行行動と能力の関係は練習と共に組織的に変化し、練習するにしたがいスキル要素の貢献度も変化するのである。又、課題

そのものが変化すれば、課題のスキル要素も変化するのである。それ故、トレーニングにおいて何が学習されたか、又、何が転移したのかを問題にするのは、転移を理解する上で重要なことと思われる。即ち、トレーニングの転移において、転移課題で必要とされるスキル要素がトレーニングでどの程度獲得されたかによって転移は左右されるのであり、まず、スキルの構成要素を組織的に分析することが必要となるであろう。”

古くから転移の問題は数多く研究されてきたが、スキルの場面における転移は今日でも矛盾した結果が出されており、ピロドーも示唆しているように、今後はさらにスキルを基本的な立場から解明することが必要ではないかと思われる。

＜お知らせ＞

シンポジウムについて

今年度学会の案内もすでに発送され、体育心理専門分科会でも、そろそろ、シンポジウムのテーマを決定する時期が近づいて参りました。シンポジウムのテーマは、従来、月例会において討議・決定されておりましたが、出席者も少なく、地方の会員の意見がなかなかうまく反映されない傾向がありました。そこで、今年度は、会員全員にアンケートを配布し、できるだけ多数の方々の御意見を伺い、決定の際の資料といたすことになりました。つきましては、同封のハガキにて、普段考えていることを自由に、お気軽にお聞かせいただきたくお願いいたします。

なお、最近10年間のテーマおよび、教育心理学会のシンポジウムを次にあげておきましたので、参考にさせていただきたいと思えます。

アンケート質問

1. とりあげてほしい内容(テーマのかたちでなくてもけっこうです。

- ①
- ②
- ③

2. 上記の内容の演者として適切な人・所属
3. その他、自由にお書き下さい。

最近10年間の体育心理専門分科会
シンポジウムテーマ

- 昭和37年 体育における生活指導
- 同38年 スポーツマンの性格特性について
- 同39年 同上
- 同40年 運動の学習過程について
- 同41年 運動学習研究の諸問題

- 同42年 運動学習における諸問題—技術習得過程におけるイメージの役割—
- 同43年 運動学習に関する諸問題—運動学習における個人差
- 同44年 「スポーツにおけるカウンセリングとスポーツ・セラピー」
- 同45年 スポーツ・セラピーをめぐる
- 同46年 体育心理学研究の課題

日本教育心理学会最近3年間の シンポジウムテーマ

- 昭和44年 1) 現代教育評価の諸問題
2) 留年学生の問題
- 同45年 1) 学習における認知的動機づけ
2) 精神薄弱児の発達を促進するための指導をめぐる
3) 学校教育における性差の問題
4) コンピューター利用の教育システムの功罪
- 同46年 1) 教育心理学の理論と方法
2) 幼児教育への寄与と方法
3) 児童・生徒理解の実践的方法
4) 高等教育における青年

体育心理学研究会会報

「曲り角」

昭和47年4月15日 発行

代表 松田 岩 男

編集 近藤 充 夫

杉原 操

杉原 隆

連絡先 東京都渋谷区西原1丁目40番地
東京教育大学体育学部 体育心理学研究室
体育心理学研究会

電話 (460)0511(代) (内)36